

GCoMM 2015 の参加報告

日本同盟基督教団 等々力教会 井上 義

GCoMM 2015 - Global Consultation on Music and Missions (音楽と宣教に関する世界会議) は、「多様な音楽や諸芸術を通して、神が世界中の人々を自らの元に導こうとされるその在り方の模索」を目的とする、福音派系宣教団体・音楽団体を母体とする国際イベントとして、2015 年 7 月 6 日から 9 日までタイのチェンマイで開催されました。"Global Consultation"であるので仰々しく訳せば「地球規模会議」であり、一般的には「国際会議」が妥当な訳語でしょうか。けれども「賛美」と「聖書講解」と「分科会」を主成分とするこの集いは、会議と言うにはあまりに音楽的であり、かつ分科会付き聖会の様相をすら帯びていました。とりわけ、言語を超えて人々の心を一つに結びつけたのは、毎日少なくとも朝夕の 2 回ずつ、各 1 時間近い時間が取られていた賛美～礼拝の時間です。時には民族色の強い、時には会場を一つの歌声に力強く導く、"global"な賛美の体験の時でした。

1950 年代のイギリスに端を発し、80 年代から 90 年代に米国で開花したいわゆる"Hymn Explosion"運動において、"Global Hymnody"という概念、即ち欧米の賛美の翻訳では無い、世界の国々の民族的賛美への注目が高まりましたが、福音派諸教会においてはこの運動は一部の例外を除いてあまり広まりませんでした。一つには、そもそも福音派起源ではない"Hymn Explosion"運動との脈絡ゆえ（その頃、福音派の人々の間では"Praise & Worship"運動が流行り始めています）、もう一つには、一風変わった異文化の賛美の歌は、もの珍しくはあるものの、音組織や調性感覚の特殊性ゆえに、とりわけ楽譜にしてみると、生きた命の息吹を他の文化の礼拝の中で再び吹き返すのが困難であったからでしょう。民族音楽学(ethnomusicology)的な知見に基づく、音楽的な再構成・翻訳がそこには必要でした。それはちょうど、20 世紀後半以降の宣教学の分野における"contextualization"（文脈化）の必要性和似ているかもしれません。

今回の GCoMM 2015 において福音派としてもっとも顕著であったのは、賛美における音楽的な"contextualization"に不可欠と思える民族音楽学的な知見が、随所に垣間見られた事でした。それにより、物珍しい博物館的な異文化の賛美の響きに「へえ～」と感心する以上に、それら異質な諸々の賛美の音と言葉の響き（時として踊りまでも）を、参加者すべてが、無意識に、深く共有し、言語や文化を超えた主の民としての一体感を味わう事ができました。そのために、入念な準備がなされていた事も明らかでした。2000 年以降に用いられるようになった神学・礼拝学の領域における新造語"ethnodoxology"（民族頌栄学、または民族礼拝学）は、ethnomusicology を強く意識した語彙なのですが、この語は GCoMM 2015

の中で頻繁に言及されており、GCoMM を理解する上での重要なキーワードであったと言えるでしょう。逆に言えば、GCoMM とは *ethnodoxology* の概念がいかなるものであるのかを理解し、体感する集いであったとも言えます。

最終日の全体会議が終わった翌日、主催者団体の役員、礼拝や各種分科会を主導した研究者たちの多くが顔を揃えた *post-conference meeting* が持たれたのですが、そのミーティングの主催者は ICE (International Council of Ethnodoxologists) でした。強いて訳すと「国際民族礼拝学研究者協議会」でしょうか。GCoMM 及び ICE の歴史や福音派内の神学的な系譜に関しては、“*Worship from the Nations*”: *A Survey and Preliminary Analysis of the Ethnodoxology Movement* (Artistic Theologian Volume 3 (2015)) において、関係者一同の共筆による優れた概説論文がありますので、興味をお持ちの方はそちらを参照なさる事をお勧めします (2015 年 7 月現在、[こちら](#)から無料でダウンロードして読めます)。

タイの福音派諸教会や、関連する芸術グループの演奏や報告は、タイという国の文化的・芸術的な豊かさを感じさせてくれました。また、タイという国が全くの異国でしかなかった参加者一人一人にも、宣教の最前線の祈りの課題を知らしめる良き機会となりました。詩篇 67 篇が全体の主題として掲げられ、二人の講師による 4 回の主題・講解説教はそこからなされました。主題歌として集会ごとに歌われた“Every Music, Heart and Voice, Rejoice!”は、ペンタトニック (5 音音階) による、素朴で民族的な響きの漂う、趣のある讃美歌でしたが、タイの舞踊風の緩やかでくねった手の動きを習い、それを皆で真似つつ歌いました。慣れない日本人、最初は気恥ずかしく感じつつも、やがてはその身振りが歌と重なり、自然にカラダに染みこんでいくのを感じました。

2003 年に米国で始まり、数回の北米開催を経た GCoMM は、2010 年にシンガポール、そして今回 2015 年にタイのチェンマイで開催されました。これに続く次回は、2、3 年後をめどにアフリカのいずれかの国での開催が目指され、そして望むらくは次々回をイスラムの影響の強い中東のいずれかの国で開催する旨、GCoMM 2015 開催期間中にニュースとしてアナウンスされました。

主催者発表によりますと、参加者は 35 か国から、総勢 200 人超との事。日本人の参加は日本への宣教師としての滞在経験者が少なくとも 5 名、日本人の信徒・牧師が 3 名いる事を事前に把握しておりましたが、全体会合での日本語での祈りの機会を頂いた事をきっかけに、パキスタン及びミャンマーでの宣教師 2 名がこれに加わり、食事の際の良き交わりの輪ができました。